

南アフリカ共和国
「Republic of South Africa」
(作品No.001-1)



作者: 松田徳通
制作監修: トキワ商事



KIMONO
PROJECT



～世界はまっとう、ひとつになれる～
The World Can Unite All Over

一般社団法人イマジン・ワンワールド
住所: 久留米市中央町31-9(蝶屋株式会社内)
電話: 0942-34-4711
FAX: 0942-35-7514
Mail: info@piow.jp



■ 奇跡の花園

アフリカ大陸は、人類発祥の地。そしてとても古い大陸。
広大なサハラ砂漠、コンゴのジャングル、大地溝帯、ナイル川・・・。
そんなアフリカの国で最初に製作をしようと思ったのが南アフリカ共和国。
喜望峰を有し大航海時代の貴重な中継地であったケープタウン。大陸の隆起によって生まれた広大な高地。
南アフリカには様々な名勝が存在する。
その中で「世界はきっと、ひとつになれる」というイマジン・ワンワールドの思想に合致するのが、
この国が勇断した「アパルトヘイト政策の撤廃」だった。
ネルソンマンデラ元大統領とデクラーク元大統領。
この二人の偉大なリーダーによって人種差別の撤廃が制度的に行われ、二人はノーベル平和賞を受賞している。
また、奇跡の二週間と呼ばれる不毛の高山地帯が花で覆われる光景は、私の記憶に深く刻まれていた。
そうだ、この国が行った人種の融和を「奇跡の花園」に譬えてみよう、
色んな花が共に咲くという光景に、この国の未来を描いてみよう、
ここから、KIMONO製作のコンセプトが始まった。



■ 花を愛するローケチ染作家、松田先生

その時に、真っ先に頭に浮かんだのが「松田徳通」先生だった。
松田先生は、日本でも唯一の「ローケチ重ね染め」という技法の持ち主で、
それ以前に、先生のやさしい人柄からなのか、お花の作品が本当に美しく優しい。
きっと、松田先生ならば「奇跡の花園」を描けるに違いないと確信した。

早速、先生にそのお話をしてみると「えっ！？南アフリカ？俺行ったことないよ」と優しく微笑まれた。
それでも、このプロジェクトのコンセプトに心から賛同されて早速、具体的なデザインの話へと進んでいった。
そこで、発見したのが、南アフリカは多くの固有種の本産国ということ。
国の花である「プロテア」をはじめ「ジャカランタ」「極楽鳥花」「アフリカキンセンカ」など
枚挙にいとまがないほど。
作家にとって初めての花を描くことは、とてもハードルが高い。
それは、緻密なスケッチ力や描写力がないと花は綺麗に描けないからだ。
ここは、画家と同じようなセンスと技術が求められるわけだが、その点、松田先生には十分な力が埋蔵されていて、
次にお会いした時にはまさにそこに有るかのように、プロテアの花やジャカランタの花が見事にスケッチされていた。
それも、色んな角度から見た姿で、つぼみや、咲きかけの様子の間まで・・・舌を巻く素晴らしさだった。



■ 完成が完全にイマジンされた下絵

意匠(デザイン)に取り掛かる際に、「着物の伝統的な取り方(構図)」をしっかりと取り入れることにした。
ここが重要なポイントで、KIMONOが絵画ではなく衣装である所以。
そこで「ジャカランタ」の花を「枝垂れ桜」のように肩から枝垂れるように描き
プロテアの花を「牡丹」のように大輪に裾に描く、そして「アフリカキンセンカ」を「雛菊」のようにあしらひ、
「極楽鳥花」を「百合の花」のように配置する。
こうして、見事なまでの「下絵」が完成した。
ここからは、先生の「天才」が如何なく発揮される。

■日本で唯一の技術「ローケチ重ね染め」

まずは、白(生地の色)から黒(最終的な色)へと至る「色の軌跡(変化)」を紫系統の彩色で想像し、その色を具体的な色彩で7段階に分ける。
薄い色から順に生地全体にその色を引き、次に色に移る際に残したい部分に溶けたロウを筆にとって、花の形に合わせて伏せる。

今ある色に、「ある色」を足すと次の色になるような色を「想像して」彩色する
【解説 生地は色を付けると、下の色と混ざり合って次の色に変化する・・・
即ち $A(\text{今ある色}) + X(\text{実際に挿す色}) = B(\text{次に目に見える色})$ となるので
先生は、Bの色を目指してXの色を実際に引く】

この天才的な色彩感覚を過去の経験値から引き出して実践し、この着物の場合は
白→薄い黄色→薄いピンク→薄い紫→赤紫→紫→濃い青紫→黒
という7回にも及ぶ色を重ねることで、実際には黒に見える地色を作っている。

さらにその過程で、残したいジャカラントの花の部分にロウを使って伏せて
過去の色を残すことで色彩を表現するという技法を用いている。

染めが進めば進むほど、ロウで伏せられた部分が多くなり、
最後のほうはロウだらけのバリバリの生地になっていくことから
目で見ると、染め上がりの想像が非常に難しく、
染め上がりの完成した色彩の設計図が先生の頭の中に確りとイメージできていないと、
花の一体どの部分を伏せたらよいのか解るはずがない。
これこそ、先生が自ら発案し完成した「重ねローケチ染め」の極意。
もちろん、他に真似ができるはずはない。

そしてこの着物には、前述した以外にもたくさんの美しい色が使われている。
ということは、その他の彩色部分は、上記の色の軌跡とは別の彩色を行ったことになる。
裾に描かれた「アフリカキンセンカ」は生地に直接ロウで溶いた染料を描く
「手描きローケチ友禅」という技法が用いられている。
遠近感でいうならば「遠」の奥行きを醸し出し
「プロテア」と「極楽鳥花」はジャカラントの花の部分がすべて出来上がった後
色のついた部分をロウで堰を作って伏せる「逆堰だし」という手の込んだ方法をわざわざ用いて、
何度も繰り返しながら、花一枚一枚、葉の一枚一枚を
ボカシや微妙な色調の変化によって生き生きと描写してこの着物を完成させています。

この完成した作品をみて松田先生は「僕の生涯随一の作品」と仰いました。
ご自身の新しい表現の扉を開いた作品とも称してくださいました。

こうして、南アフリカの人々が成し遂げた人類の融和を
漆黒の大地に咲く「奇跡の花園」という形で表現した作品が完成しました。

製作者 衣扇 四條庵

技法 西陣特殊錦

南アフリカ共和国の帯は、西陣で絹糸の素材にこだわり、10中(となか)といわれる細い番手の絹糸を用いた織物を創作する「衣扇 四條庵」の奥野社長に製作を依頼した。

日本の伝統的な「市松」という格子を並べたデザインを基本にして、アフリカの花をデフォルメした文様を石畳のように配置し、南アフリカ共和国のナショナルカラーである黒・赤・緑・黄・青の色彩鮮やかな色を使って、インパクトのある配色で織り上げている。

地色に使われたのは鉄紺色で、全体をシックにまとめる狙いを感じ取れ、鉄紺と黒の微妙な彩色の変化によって、織物としての奥行きが醸し出されている。

原色を多く使う彩色は、それぞれの色の面積で印象が変わるために、地色とのバランスを色ごとに変えることで、それぞれの色の印象が同じように目に残る工夫が施されている。

また、同じ文様を繰り返しているにもかかわらず、帯全体に変化を感じ取れるのは、アクセントとして織り込まれた「白」の糸の効果といえる。

この帯は、表地のみならず裏地にも表と同じ文様を織り上げることで、変わり結びなど着装時の着付けによる表現の自在性を高める配慮もなされ、実に細部にいたるまで製作者の気遣いを感じ取ることができる。

織上がりは見た目とは違い、非常にふっくらと軽い織上がりになっており、10中という細い絹糸にこだわった製作者の「真の意図」によって、見て楽しむばかりか締めても締め心地のよい、帯に本来課された命題を成就させている。

花柄のKIMONOとのコーディネートは、一般的な組み合わせとしては、色彩のバランスが難しい面も感じられるが、アフリカの人々の華やかさを好む感性を重視し、敢えてこのような色彩を重ねるコーディネートとした。

イマジン・ワンワールドの作品に寄せて
(文責プロジェクトリーダー高倉慶応)

